

アレヴィーの歌

儀礼におけるコミュニケーションツールとしての音楽

鈴木 麻菜美 (国立音楽大学大学院)

本研究は、宗教儀礼の中で信徒たちによって共有される音楽について、その特徴を分析し、表現的コミュニケーションのツールとしての意義と役割を探究するものである。その例として、アレヴィーの「メルスイエ」と「ミラチラマ」を取り上げる。

アレヴィーとはトルコを中心に分布する宗教グループの一つで、その信仰はイスラム教シーア派やスーフィズムの影響を受けている。彼らの儀礼ジェムでは撥弦楽器サズを伴奏として民謡（デイシュ）が音楽家（ザキル）によって歌われ、儀礼を構成する重要な要素となっている。

デイシュは歌詞の内容によってタイプが区別される。「メルスイエ」はそのタイプのひとつで、イマーム・ヒュセインの殉教を描いた哀歌である。ジェムの中でこの歌が歌われる際、ザキルは嘆くような声とかき鳴らすサズの音をもって殉教の哀しみを表現し、信徒は互いに手をつないで聴き入ることで宗教的な哀しみを共有する。「ミラチラマ」も同じくデイシュのタイプのひとつで、預言者ムハンマドの昇天の様子を描いたものである。この歌では、信徒たちは歌詞の内容に伴い「立つ/座る」「顔を拭う」「セマー（アレヴィーの宗教的旋回）を回る」などの演劇的な動作を行う。

本発表では、《今日悲しみの日が来た Bu gün matem günü geldi》はじめジェムで歌われるメルスイエのレパートリーからサズの演奏法、歌詞と歌い方などを観察し、いかにして「哀しみ」が演出されているのか、聴衆である信徒にどのように受け止められているのかを分析する。また、これら二つのデイシュは歌詞にあわせ信徒たちがある動作を一斉に行う点が共通している。動作を行うことと音楽とがジェムの中でもたらず効果についても考察する。

これにより、アレヴィーの中で宗教的なつながりのためにサズの演奏や民謡がどのように利用されているか、その意義と役割、重要性を明らかにする。